



特集② 禁止薬物

薬物再犯防止

啓発運動について

保護司 上野 修

はじめに 保護司の仕事

保護司は法務大臣から委嘱を受けたボランティア（非常勤の国家公務員）です。

主な仕事としては、違法薬物に限らず、過って罪を犯した人の立ち直りに寄り添い、社会に復帰するためのサポートや「社会を明るくする運動」などの犯罪予防活動を行っています。

保護観察と生活環境調整

保護観察においては、保護観察処分や仮釈放になった人と面接し、生活状況を見守ったり、相談に乗る・必要なアドバイスをするなどの指導をします。就職のためにハローワークや就職先に付き添うこともあります。

また、刑務所や少年院に入った人の社会復帰に備え、その引受人に会って、本人を迎え入れることができるか、出所後

二 犯罪予防活動から薬物再犯防止 啓発ビデオ制作へ

の生活の見通しを聴き、環境が整うよう相談に乗るなど、生活環境の調整を行います。時には、刑務所や少年院に面接に赴きます。

「どうしてあの子があのようなことをしたのか分からない」「子どもの頃から厳しくしすぎたのかもしれない」「精神的なストレスを抱え、条件が合えば、スイッチが入ることが分かったので、出所したら受診させたい」などなど、家族も本人の将来を考え、再犯をさせないように、色々悩んでいます。中には、覚せい剤事犯で服役中の子に対して、「家族に散々迷惑をかけてきたのに、まだ懲りずに刑務所の世話になっている。どんな顔をしてここに帰りたいと言うのか!」と述べた年配の母親に会ったこともあります。

私たちは長年にわたり、薬物乱用を防止するため、「社会を明るくする運動」に参加し、「ダメ。ゼッタイ」を合言葉に薬物乱用防止の啓発活動を行ってきました。けれども、薬物事犯者の数が高止まりしている現実や違法薬物を使用してしまった人の社会復帰を考える時、「ダメ。ゼッタイ」だけでよいのか、新たな啓発ツールが必要ではないかとの思いから、左京区保護司会では、「薬物依存症は病気です」という啓発ビデオを制作しました。私たちは平素の保護司活動のように、本人とその家族に寄り添うという考えでこのビデオを作りました。

制作にあたり、「何が原因で人は違法薬物に手を染めるのか?」「薬物依存症とはどのような病気で、どのような治療法があるのか?」「警察の担当者は薬物犯罪をどのように考えているのか?」「薬物依存者の社会復帰に当たり、自助グループではどのような問題があるのか?」という

疑問について、関係する専門家からレクチャーを受けました。レクチャーを受けるまでは、「犯罪と分かっている、どうして薬物に手をつけるのか」「先輩や仲間の誘いを断ることができないからではないか」「違法薬物が身体や神経細胞に及ぼす影響・怖さを知らないため、若者の間に使用が広がっているのではないか」と考えていました。

予想外だったのは、精神科医から、「薬物依存症は脳の病気であるとともに、人間関係の病気でもある」と聞いたことでした。それまで薬物事犯を「犯罪者と更生」の観点からしか見ていなかったことに気づき、薬物事犯者が薬物に手をつける原因として、「人間関係」という新たな要素を知ったのです。

それは、「薬物依存者の大脳では、実際に脳内報酬系で異常が起きている。薬物依存者は対人関係においてストレスを感じやすく、生きづらさを抱えている。生

きづらさを感じると、また薬物を使ってしまい、孤立を深める。こうして依存の悪循環に深くはまり込む。薬物依存者は『やめたいー使いたい』という気持ちの間で苦しみながら闘っている。薬物使用時の強烈な快刺激が脳に刻まれているため、定期的に再使用欲求に襲われる。「この再使用欲求に意志の力で勝つことは至難の技である」というものでした。

様々なレクチャーを参考にしました。薬物依存者とその家族、友人、地域の方々が、薬物依存症は病気であり、病気には治療が必要であることを理解することで、地域における薬物依存者に対するイメージが変わり、治療を受ける環境が整い、治療を受けられるようになることで、薬物事犯の再犯を防ぐことにつながりたいと考えます。

啓発ビデオではこのようなメッセージを二分間で伝えています。

※QRコードビデオ画面の表示(写真)

※ (You Tube <https://www.youtube.com/watch?v=j1DFoh3SD>) をご覧いただけます。

三 啓発ビデオ制作から特別シンポジウムへ

完成後、啓発ビデオは、左京区保護司会や他団体における講演会、国連アジア極東犯罪防止研修所における発表など、多方面で高い評価を受けました。制作の意図が薬物再犯を防止することなので、京都市保護司会連絡協議会に市民に向けた特別シンポジウムの開催を提案したところ、平成三一年三月一三日に大谷大学講堂において、同シンポジウムが開催されました。当日、遠くは舞鶴、綾部地区からの来場者を含め508名もの参加者がありました。同シンポジウムには「薬物依存症からの回復は人間関係の回復から」というサブタイトルが付され、「薬物依存症は病気です」をより明確に訴求できるようになりました。私も保護司の立場からパネリストとして意見を発表しま

「犯罪」という言葉から感じるニュアンスが心の中で変わってきています。

「薬物に手を染めた人は社会からの脱落者」という通念は、薬物依存者の社会復帰に際し、大きな壁となっている現実があります。薬物を使うことは犯罪に違いないのですが、多くの場合、犯罪を起こす人は家庭や友人関係、仕事などで恵まれない人が多く見受けられ、身近にそのしんどさを相談する相手がいないなど、日常の中で居場所や理解者がいないなどの共通点があるように思います。取り締まって罰を科すだけでは、この負のサイクルは止まらないように思っています。

近年、SNSの普及により薬物が簡単に手に入るようになった環境の変化もありますが、人に言えない問題を自分自身で抱えきれなくなり薬物にはまったケースも見受けられます。最近の薬物事犯の低年齢化の現象を目の当たりにして、啓発活動とともに、同時に、子どもたちの

した。

シンポジウムにおける専門医と私の発表は好評でしたが、三重ダルクの市川岳仁代表の発表は衝撃的なものでした。

・アルコール、薬物、ギャンブル、窃盗をやめられなくなった人がダルク（自助グループ）に来られます。ハマったものが何であれ、支援する場合、あまり大きな違いがないので、対象を分けて考えません。なぜならば、取り戻すべきは過去ではなく、これからの人生だと思うから。

・彼らが苦しんでいることは、薬物問題だけでなく、もっと前からその原因があります。薬物依存者の多くが過去に虐待を受けている。生まれ育った家庭や地域の中で暴力などの被害に遭っています。例えば、ダルクに来る女性の二人に一人が過去に性被害に遭っています。その苦痛を紛らわすお酒や薬物が、生きるために欠かせないものに

なっているように見えます。だからやめても解決しない。やめればしんどくて仕方がない。

・外部から見るとお酒や薬物に対するコントロールを失ったように見えますが、当の本人はコントロールなど失ってないなくて、むしろ必死にお酒や薬物の力を借りて自分をコントロールしようとしているように見えます。ですから、誰がどのように薬物の害を述べても、止めようとしません。

シンポジウムは大きな反響を呼び、熱心な質疑応答のうちに閉会しました。

※ビデオは下記URL、またはQRコードからご覧ください。

おわりに

保護司を拝命して今年で一四年目、保護観察になった人とその家族と接して、

家庭を含めた生活環境にも目を向け、「朝ご飯を食べているか」「家庭内暴力はないか」「最近変わったことはないか」「給食を食べているか」など、細やかな観点から学校の先生、教育委員会、更生保護の団体、社会福祉協議会等と連携して、子どもたちの抱える問題の解決を探り、薬物事犯を含めた、新たな犯罪を起こさせないような包括的な対策が必要ではないかと思いはじめています。

Profile プロフィール

上野 修 (うへのおさむ)

同志社大学経済学部1975年卒業
小学校のPTA会長、町内の自治会長になった頃、地域の先輩からの推薦を受け、保護司の委嘱を受ける2005年、

左京区保護司会理事2013年、
左京区薬物乱用防止指導員協議会会長2015年、

「薬物依存症は病気です」左京区保護司会ビデオ制作に関わる。2018年

株式会社フェアウインド（自営）で、1983年よりデザインディレクターとして数多くのプロジェクトに関わっている。



写真撮影：川見善孝



<http://www.youtube.com/watch?v=jlDFoih3SI>